



# 東海村「つながる」サミット

## シンポジスト①

ねもと薬局 総括マネージャー

根本 みゆき 氏



健康サポート薬局の立場から、話をさせていただきたいと思えます。  
ねもと薬局グループは、東海村に2店舗あります。東海駅西口にあるのが、東海クリニックの脇の舟石川店です。こちらは注射のマークがありますが、難しい注射の調剤もお受けできる薬局です。東海村立病院横にありますのが、病院前店です。20年来のお付き

合いのある方もいらっしゃいます。東海村の皆さんに支えられ、ご支援させていただいています。

健康サポート薬局が平成27年に定められ、かかりつけ薬剤師、薬局として地域住民の皆様の健康をサポートする機能を持つ薬局として当局も国から認可されています。

その流れから、ねもカフェというものを開いています。舟石川店の方では、毎月1回、病院前店の方では、2カ月に1回行っています。当薬局では、管理栄養士と一緒に働いています。薬局で血液検査などができるようになり、食事アドバイスや食生活について気になった患者様を繋げたりするような役割を果たしています。

カフェの説明ですが、2つの薬局でやっているカフェの働きが少し違います。舟石川店では、食生活やライフスタイルを見直すカフェとして、健康を目指してローカロリーメニューの

### ◆シンポジスト

**根本 みゆき 氏**  
(ねもと薬局 総括マネージャー)

**小藺江 利之 氏**  
(有)おその江 代表

**大内 智弘**  
(東海村社会福祉協議会 地域福祉推進係長)

### ◆コーディネーター

**山下 興一郎 氏**  
(淑徳大学 総合福祉学部 社会福祉学科 准教授)

### ◆コメンテーター

**奥田 知志 氏**  
(NPO 法人抱樞 理事長)

※発言者は敬称略

提案をしています。また、病院前店では、オレンジカフェといまして、認知症を意識して、たんぱく強化のメニューの提案をしています。カフェの風景ですが、学生も相談会に参加しており、和やかなムードで行っています。薬局としてとても珍しい役割なので、遠方から記者の方もお越しになります。

美味しいスイーツなども作っていますが、管理栄養士達が前日に作っています。100キロカロリー未満のおやつを提案したり、オレンジカフェでは、たんぱく強化のメニューなので、140キロカロリー未満の美味しいおやつを食べたりしながら、また、うちの薬局で販売もしています。ハーブティーを飲み、お話を聞きながら、時間を過

ごしています。出張カフェも行っています。いろいろな所でカフェの活動をしています。

## ねもカフェスイーツ例

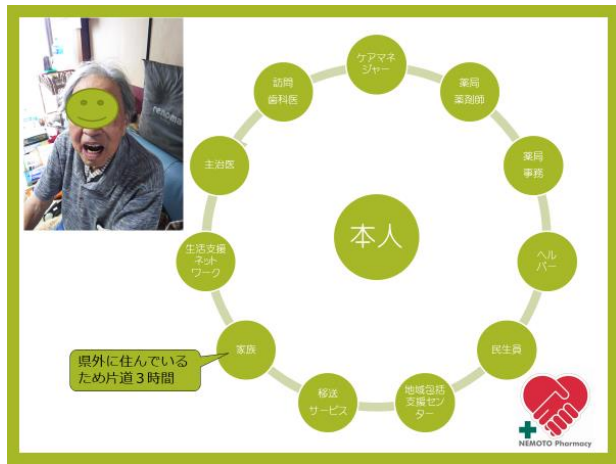


季節を意識したスイーツをご用意したりも・・・

また、1カ月に1回は、栄養やおむつなどの介護に関する勉強会も行っています。地域のケアマネジャーや、病院、社協、役場、包括、薬局の皆さんをお招きして、一緒に勉強会をしています。大切な多職種連携の場所としてつながっています。この場が進化したのが、「むらカフェ」です。むらカフェは平成29年から始まりました。偶数月の第2水曜日の19時から総合福祉センター「絆」にて、医療と介護と福祉の方々と集まって、顔の見える関係づくりを行っています。また、むらカフェ番外編として年に1回、バーベキューをして、楽しみながら連携の時間を過ごしています。

最後に一つの事例を紹介します。90代の男性です。踊りの先生をやっている、2階のアパートに一人でお住まいの方でした。炊事・掃除全て自分でこなしてお薬も一つずつ自分で取り分けて飲んでいました。ところが、インフルエンザにかかって外に出歩けない状況になってしまったから、自分のことが一人で行えない状態になってしまい、心配になり、地域包括支援センターに連絡を取ったところ、それまでお元気だったのでセンターでも把握しておらず、ケアマネジャーもついていない状況でした。本人から「食料品を買ってきてほしい。」という依頼や「内服薬も足りない。」というような訴えも多くなったので、お宅を訪問し、朝昼晩と薬を飲むように調剤をしました。また、「睡眠剤が足りない。」という訴えなども増え、地域包括センターの職員と連携を取り、一緒に訪問しました。

また、入れ歯の不具合も多い方でしたので、訪問歯科医とも連携を取りながら、見守りました。最終的にたたくさんの方がご本人を支えていました。県外に住んでいる家族だったので、毎日の生活において地域のケアスタッフが支えた事例です。



その人がその人らしく地域で暮らせるように、元気な頃から知っている薬局だからこそ、繋がれることがあると思います。その人に合わせた支援、多様な暮らしを支える食育はとても大事です。管理栄養士から、食事に関してアドバイスをいくことが大事だと思います。このように、多職種協働の活動をしていますので、地域への紹介もスムーズです。定期開催するところで、多職種から高齢者に限らずいろいろな相談が入りやすくなっていると思います。処方箋なしに地域住民のそれぞれの病気や生活に関する不安に合わせたアドバイスができるようになっていくのかなと思います。

薬局として地域のファーストアクセスになりたいと思つて、日々精進しています。ご清聴ありがとうございます。

**山下** 地域のファーストアクセスになりたいという決意が、とても心強いと思えました。ご紹介の事例の方がインフルエンザになられた時、どのような言葉かけをしましたか。

**根本** インフルエンザになられた時は、「根本さん、お弁当持ってきてよ。」という電話が入りました。自分でお弁当を買いに行けないという状況のようでした。

それまで、踊りの先生をしていたので、とても足腰が強い方で、大きな声で挨拶をして薬局に入ってからの方だったので、強く印象に残りました。お電話を頂いた時はとても衝撃を受けました。

**山下** 事例の90代の方が、このように薬局とつながっていること、そして、自らSOSを出せる関係が根本さんと創られていたがすごいと思います。地域包括支援センターにつながる手前の方々にとっては、最初のこのつながりが身近にあるかないかというのが大切なのです。

## シンポジスト②

(有)おその江 代表

小藪江 利之 氏



私は平成元年に家業を継ぐために、27歳の時に東海村に戻ってきました。お米・お酒・お弁当を販売する小売業を経営しています。平成12年に先代より代表権を譲り受けて社長になり、現在約20年が経とうとしています。平成13年には「移送サービスはーとろーど」、平成14年、長男が小学校2年生の時からPTA会長として、平成15年には、軟式野球スポーツ少年団を立ち上げるなど、地元の皆さんと一緒に活動をしてきました。そして、3年前に移動販売を展開することになり、現在では多くの買い物が困難な高齢者が多く利用してくださっています。

ある時、一人暮らしのおばあさんに、「私が生きているうちは小藪江さん、お米の配達よろしくお願いしますよ。」と言われ、それが胸に突き刺さりました。報道でも盛んに買い物難民問題が取り上げられていて、地元でも買い物弱者問題、地元商店街の衰退化や新規の加盟店もないという問題が山積していました。また、高齢者の事故多発ということで、加害者側の高齢

ドライバーの免許返納が注目されているなか、住まいの半径500m以内に買い物ができる所がない、ポストすらないという状況がどんどん顕在化してきています。

かつて移動販売は、魚屋さん、豆腐屋さんが鐘を鳴らして売りに来ていましたが、そのような光景が最近見られなくなったのはなぜでしょうか。移動販売は、3年程度は続きますが、途中で皆撤退してしまいます。

その理由を調べるために、伝手を頼りに、かつて移動販売の経験がある方への聞き取りから始めました。結果、売れ残った物が廃棄になってしまい、それらがせつかくの収益を阻害して、経営を持続させることが困難となり撤退せざるを得ないということが分かりました。関連する書籍で移動販売を調べていると、徳島県に先進事例があることが分かり、平成24年に現在では全国展開している「とくし丸」さんを視察して、成功のヒントを得ることができました。

当初は、地元の商店街の魚・肉・野菜をそれぞれの店からピックアップ

して、私の一台の車に積み込んで、地元の買い物困難者を訪問するというプランを組み立てましたが、それぞれのお店への利益分配や受注・発注等の事務機能等、その他いろいろな問題はどうクリアするかという答えがなかなか出てきません。

そこで、地元のスーパーと提携してみてもどうかとイオン・カスミ・ステーションコムなどの地元を展開しているスーパーさんと話し合いの場を持ちましたが、双方なかなか条件が折り合いません。そんな折、常陸太田市が本社のスーパー、かわねやさんの専務さんと別件で一緒に話してみることができました。移動販売の件をお話してみると大変興味を持っていただき、目指している方向も一緒であるというところで、くるくるマルシェの事業化を大きく前進することができました。

くるくるマルシェには、オリジナルのテーマソングがあります。私が作詞をして、知り合いのプロの方に作曲してもらいました。この音楽が流れると、いつものお得意さんが笑顔で集まってくる。このように、地域の繋が

りを大事にしながらくるくるマルシェを運営しています。

移送サービス「はーとろーど」は、役場の住民課に行ったときに知り合の職員に呼び止められ、「県内でもすでに先進的な移送サービスを実施しているところがある。その事業を東海村でも立ち上げたいから、協力してほしい。」と依頼されたことがきっかけです。

移送サービスボランティアは、当初国土交通省と話し合いながら、地元の商店街につながる目的で始めましたが、商店を営む夫婦どちらかが移送サービスに参加すると、店舗の対応が厳しくなってしまうという状況が続いたため、平成13年に、現在のような「移送サービス・ボランティア協力会員」の体制を整え、バス、タクシーなどの公共交通機関を利用することが困難な高齢者の外出をサポートし、地域社会とつなげる役割を果たしています。

PTA活動については、校長先生との関わり、地域での関わり・繋がりを与えてくれたきっかけとなりました。

そのご縁で保護者同士の繋がりも増え、東海村で初の「軟式野球スポーツ少年団」を立ち上げることができて、現在も元気に地元の子供たちが活動をしています。交流試合などで他の市町村のスポ少との繋がりも広がっています。

### 1-1.移動販売を始めたきっかけ

- ・もう一つの高齢者問題→買い物難民(買い物弱者)  
＜豆腐一丁買うのにバスやタクシー＞
- ・商店街の衰退化→東海村では村松商店会が脱退  
＜次は真崎商店会？駅前フローラ商店会？＞
- ・激変する車社会→高齢者の事故多発！  
＜被害者だけでなく、加害者も続出＞
- ・距離が新たなバリア→近所の商店が相次ぎ閉店  
＜自宅の半径500m以内で買い物ができない、ポストもない＞
- ・お客様の嘆き→高齢者の孤独化  
“おそのえさん、アタシこのまま死んちゃうのけ？”

訪問スーパー  
**くるくるマルシェ**  
おうちの扉がマーケット！！



**山下** くるくるマルシェの始動の時に、エリアの開拓で、村内一軒一軒を訪ねて歩いたと聞きましたがどういう反応がありましたか。

**小藪江** 東海村の地図を25等分しまして、月間25日分の新規開拓用のグリッドを設けました。一日100軒訪問を目標にして歩いてみると、断られるところが大半でしたが、「明日からお願いします。」と「そのうちに必ずお願いします。」いうところを色分けして、地図に落とし込みながら移動販売の巡回ルートを組み立てました。

**山下** 一軒一軒をノックするということは、民生委員さんがされてきたことですが「困ったことはありませんか。」と聞くと、「困ったことはありません。」と言われてしまいます。小藪江さんは、一軒一軒訪問されて、「くるくるマルシェをお願いします。」と開拓されたら、「明日から来てもらえますか。」という家が出てきたということ、そして営業利益黒字運営というのがすごいことですね。小藪江さんの才覚が発揮されて、とても良かったと思います。

### シンポジスト③ 東海村社会福祉協議会 地域福祉推進係長

大内 智弘



医療関係と、商工関係で地域とつながって日常生活を支え始めている事例を前のお二人で紹介して頂き、東海村の力強さを実感しています。私は自分が何をしているのかではなく、住民活動の繋がりの方ではなく、住みかある支え合いコーディネーターの立場として、話をさせていただきたいと思っています。

東海村社協が目指すものは、地域共生社会、皆が共に暮らし、支え合いながら生活していく社会です。国の方針でも、地域共生社会が叫ばれています

が、東海村社協はどのように取り組んでいくかということに触れて、そこから事例に触れたいと思います。

今、地域の課題は複雑化しています。そこに対して、住民活動等「民の領域」と、公のサービス、ハローワークですとか、自立相談支援機関、行政など、「公的な領域」とが一緒に対応していかないとなかなか今の課題に対して解決することは難しいです。今、各行政に生活支援コーディネーターが配置されていますが、東海村では、支え合いコーディネーターと呼んでいます。これは、高齢者の問題だけでなく、全ての課題に対して対応していかないと、なかなか今の課題に対しては解決できないためです。支え合いコーディネーターは、対象を限定していません。

私は地域福祉推進係に所属し、住民活動、民の領域をつなげたり、コーディネーターするという支援を行っています。今日は、民の領域の連携について中心に説明したいと思います。東海村の地域を支える様々な住民活動は、紹介しきれないくらい多岐に及んで

いますので、一部の紹介になります。まず、地区社協の活動があります。

地区社協は村内小学校区ごとに6地区ありまして、地縁のボランティア団体として地域の特徴に応じて、活動している団体です。世代間交流事業や、見守り、ふれあい食事会、交流の場など地域に応じてやっています。その他にも、ふれあい・いきいきサロン登録が現在42団体あり「出かける楽しみ、会えるうれしさ」をキャッチコピーに人と人が繋がる場所、居場所づくりをしています。サロンも多岐にわたり、場所によって高齢者がお茶や食事を介して楽しくおしゃべりしたり、年代を超えて集まったり、お話する場を提供したりしています。また、子育て系のサロンや地域に根差したサロンとして活動する団体もあれば、東海村全域をターゲットにし活動している団体もあります。

次に、地域支え合い活動団体です。介護保険の関係で65歳以上の高齢者を対象にしています。活動としては、サロンと同じ様な活動内容です。地域の中での居場所づくりに焦点化して

いるのが、特徴的です。9団体が村内で活躍しています。

次に、ボランティア活動、有償サービス活動です。登録ボランティア団体は村内に110団体あり、福祉、環境、生涯学習など、それぞれの活動をしています。福祉施設への訪問も快く引き受けて下さっています。

あと、実費弁償をもらいながら活動をしている団体として有償サービスがあります。家事援助・移動・子育ての団体が住民サービスとして活動しています。

### ボランティア活動・有償サービス活動

村内で活躍するボランティア団体（110団体）  
…福祉・環境・生涯学習分野などなど、それぞれがテーマ型でボランティア活動を行う。  
有償サービス団体（3団体）  
…家事援助・移動・子育ての3団体が住民サービスとしての柔軟性を活かしながら活動中！

▲シルバーリハビリ体操  
▲住民サービスによる家事援助  
▲広報の点訳ボランティア  
▲住民による移送サービス

次に、「〇と〇」と言うような「と」の連携で深まる活動について紹介します。それぞれの活動や事業がつながると取り組みに深みが出るがあります。それぞれの活動にコーディネーターが関わることでつながりが生まれ、さらに深みが増すという効果があります。事例を紹介させて頂きたいと思います。

一つ目が地域の居場所と相談支援です。相談を受け支援を必要とする方を地域資源につないでいます。地域での活動や、サロンに参加しませんが、というようにもちかけることもあります。地域の居場所に相談支援をプラスして、相談を受けられるようにしています。

私たちが相談を受けるだけでなく、地域包括支援センターが南台のカフェで定期的に出張相談の場を設けていたり、緑ヶ丘の居場所づくりでも村社協の出張相談を今年度から試行的に始めたりしています。

もう一つは、地域の居場所と福祉教育です。ここでいう福祉教育とは、全年齢対象です。出前講座で、地域の居

場所づくりの際に、住民同士の課題発見の目を養うために寸劇をする等、取り組みやすいように工夫しています。気付きの視点から相談機関につなぐことを行っています。

もう一つが、ボランティア活動と福祉教育です。村松小学校の事例ですが、コミュニティスクールの指定校になつていきます。地域親として、地域の力を学校教育に取り入れようという試みです。

地域の方から絵手紙を教わって、地区社協が行う世代間交流事業で絵手紙をプレゼントすることにつなぐだけ、シルバーリハビリ体操指導士会に指導を受けて、生徒に覚えてもらい、今度は生徒が高齢者にリハビリ体操を教えたりしています。このように「と」の連携でつながっていき、活動に深みが増すように取り組みがされています。

活動の中で住民同士をつなぐだけでなく、住民と一緒に活動をするのもやっています。これが、絆まるっとプロジェクトという活動です。専門職と住民の方々が話し合いを持ち、協議

する場です。生活圏内に合わせて、話し合いの場を設けています。

村全体で話し合う、第1層協議体が、絆まるっとプロジェクトです。これは、困りごとがあったら、アイデアを出して仕組みをつくっていくものです。

第2層協議体は、小学校区等での話し合いの場です。真崎地区は、住民同士の横の連携を作っていくため、関連団体の連絡会議が既にあり、そこに協議体を位置づけさせていただきました。第2層協議体には村社協も参加し、特に介護予防の活動に力を入れて取り組んでいます。村松地区では、住民の足の問題、子育ての問題について話し合いを進めています。

地域の課題や取り組みたいことについて、地域ごとに考えながらつながりを創って、話し合い活動をしているのが特徴です。

最後に、地域単位で行うお助けマン的な活動、支え合い活動を紹介します。南台地区での「はんどちゃんネットワーク」から始まり、舟石川3区の「ちよこつと隊」、真崎地区の「助け合い隊」などというように、地域ごとで支

え合い活動として、取り組みが進められているのが最近の特徴です。

また、他の地区でも支え合い活動を行っていききたいと、声掛けをしている所もあり、私も相談に入りながら準備をしています。

生活課題の解決に向けて既存の活動をつなぐことを中心に、「と」の連携を意識し、活動に深みを増すことで、さらに輝く活動になると思います。つながりを意識した活動というのを今後コーディネーターとして意識して取り組んでいきたいと思っています。

**山下** 三者それぞれ特徴がありまして、「助けて」を受け止める力を持つ薬局づくり、そして、地域を耕すくるマルシェの移動販売の地域密着化、住民同士が繋がって生活課題に取り組む活動の広がりというこの3つの生活支援体制がいま東海村でどのように展開しているかという話だっただと思いますが、奥田さんは聞かれてどのように感じられましたか。

**奥田** わくわくしながら聞いていました。ねもと薬局の健康サポート事業の仕組みがとても良いと思いました。その人がその人らしく居られる地域であるということが大事だと思います。理念や、何のためにやっているのかを言葉化されることも大切です。仕組みづくりだけではなく、その人がその人らしく、その地域で最期まで暮らせるために活動しているということが、何よりも大事だと思います。移動販売のことは、非営利団体活動で、お金で苦労していると思いますが、いかに継続性を担保していくかということが大事だと思います。



私は居住支援の取り組みを始めましたが、国交省が住宅セーフティネット情報をつくり、居住支援団体をつくりました。団体は、230あります。半分は不動産業界です。半分はNPOと福祉です。異業種交流です。不動産は利益を生み出すのが上手、福祉は人の支援が上手です。うまくコラボして、持続・継続性のあるモデルにすることが大事です。

最後に、人を支え、つなげるコーディネーターの役割はとても大事です。今、多機関連携とよく言われますが、例えば100人の村で80人が連携をしたとします。でも、残り20人をどうするのかというのが、多機関連携なんです。そこが問題です。既存の連携がある所に、どうやって多機関連携するかということを考えてはなりません。

声をあげない人たちをどう支えるのか、今問題を抱えている人を多機関連携でより総合的にケアしていくか、支援していくかに、大きな意味があります。多機関連携に入っていない人はどうするのかを大内さんにお聞

きしたいです。

**大内** 我々も専門機関として、連携しながら取りこぼしのしないように取り組みをしていこうと、多機関連携では意識して行っています。それでも拾いきれない部分はどうするかについて、この事業が始まった時に、全員の民生委員に何か困ったことがないかどうかを調査してもらいました。今ままで把握しなかったことを拾えるように取り組みました。

今後、新たに調査をお願いしていきたいとも考えていますし、専門職で繋がりがきいていない部分は、地域の協議会の中で連携を強めていきたいと思っています。拾い漏れのないように強く連携を図っていく必要があると考えています。小菌江さんや、ガス屋さんなどの商工関係の方から情報を受けて、相談に繋がるケースもあります。未開発の部分もありますので、訪問をする業者とも連携を図りながら、今まで繋がることのできなかった部分とも連携していきたいと思います。

**奥田** 薬と食べ物、日常の基本ですから、日常性の中からうまくつながるとよいと思います。

**山下** 発見と気づき、アウトリーチはどのように進めていけばよいのでしょうか。周囲は気づいているけれども、ご自身に困り感がない方のファーストスノック、扉をどう開いていた

のか、私たちの試行錯誤が続きます。扉を開かれるのは、簡単なことではありません。特に人との関りが薄い地域では本当に深刻な問題です。東海村の取り組みは、今後他地域の参考になると思います。関わっている人たちが発見して、なにか課題があるのではないかという気づいた時、私たちは、どのようにつないでいくのでしょうか。あなたは「一人ではないよ」というメッセージをも伝えていくことが大切ではないかと感じています。

それは、東日本大震災の後、被災地で配置された生活支援相談員という市民が毎日、扉が開かなかった仮設住宅を訪問しながら、孤立を防ぐ大切な発見をしています。日常においても、

移動販売や、住民活動の中で人と人がつながる社会を創っていくというのが、今後の地域共生社会、多機関連携の第2ステージになっています。東海村社協がそこに取り組み、連携を深化させる仕組みをつくらうとしているということですね。



会場より質問をいただいています。『50日間、不登校の7歳の子がいます。母親が毎晩幼児期と同じように寝

かしつける。お母さん離れができていないのではないか。その子は「お母さん大好き。」と言いながらお母さんにキスしたり、抱き着いていたりする。それを母親が無言でさせている。お母さんがいないと学校に行けない状況で、神経が過敏で人前でしゃべれない、友人を作ろうと思わないという状況である。』と。質問者の方は、今の母子を目の前にされて、どうすればいいのか悩んでるんですね。

こういう時、薬局だったらどうするか、小菌江さんならどうするか、社協の人ならどうするか、奥田さんならどうするか、私ならどうするか、答えは一つじゃなくて良いのでお伺いしたいと思います。どうやって解決するか分からないことを目の前にした時に、児童相談所や村役場、主任児童委員さんに伝えて、お任せする手前に、市民として、その子、お母さん、家族のことと、地域社会のことを考えてみませんか。この質問は、PTA会長もやってきた小菌江さんのお感じになったことをお聞かせ下さいませんか？

**小菌江** 子どもは、どこかのタイムイングで親との距離感との間合いを図っていくことが必要だと感じます。お母さん、お父さんだけでなく、地域が関わっていかなくてはいけないと思います。

お母さんが地域との関わりを得ることで、地域との間合いが詰まっていくと、関わりが増えていくことも大事です。子どもを承認してあげて、自主性を尊重してあげると、子どもはがんばれます。子どものある時期に刺激を与え、皆で育てていくことが大切だと考えます。

**山下** 子どものことを受け止めますよという姿勢が大事ですね。根本さんはどうお感じになりましたか。

**根本** 私が思ったのは、まず、お母さんがどう思っているのかということ。お母さんが抱えている悩みや、そして子どもは何が不安なのか、お母さんから離れられない不安があるのではないのでしょうか。子どもの不安にも寄り添うことが大事だと思います。

家庭や、環境の面でどうなのでしょう。福祉行政とも相談できるような働きかけをと思います。

**山下** お母さんの気持ちと子どもの気持ちと環境が気になりますね。社協はどうですか。

**大内** 専門機関につなぐことと、住民活動につなぐこと、つなぎながら調整していくことで、お母さんが抱えている問題と、世帯としてどのような支援が必要なのか、原因を探すことが大切だと思います。育児のサポーターや、サロンなど、地域の中でお母さん同士の関係づくりをして、解決できる場合もあると思うので、その時に応じて、適宜関係をつないでいくことが社協の役割かと思えます。

**山下** 今、起こっていることについてそれぞれの立場の方がどう向き合うかについて、ご意見をいただきましたが、それも一つの答えだと思えます。地域の方々が、どのように関わろうとするか、考えを出し合うことが地域共

生社会を目指すかが大切です。

私の場合は、問題とは捉えずその人にどうやって会えるか、会いたい気持ちを伝えるようにするためにどうすればよいかを考えます。質問者はお母さんに会いたいと思っているのかもしれないので、「どういう状況なのか一緒に見に行ってもらえないかな。」と伝え、関係を広げていきます。また、お母さんと子どもの周辺を探り、学校や近所の方から情報を入手することも有効かもしれません。添い寝はいつまでなのかを考えると、それは個別性なのかなと思います。





**奥田** 私の長男が不登校で、中1から3年間ずっと学校に行けない、中2の途中から死ぬ、生きるという、ぎりぎりまでいって、最後に沖縄の島に行つて一人生きのびました。そういう経験もあるのですが、こういう話は切ないので、これは何が問題なんでしょうか。

この子はお母さんが安全地帯になつていて、母親と居ること生き延びています。この子は母親を選んでいきます。母親にしがみついて生き延びています。何を問題とするのが大事です。

社会の常識にお母さんがこだわっていて、「〇〇しなければならぬ」ということを最優先で考えてしまうと、この子は問題だという話になります。ひよつとしたら、このお母さんが既存の価値観の中で苦しんでいるだけかもしれません。

もう一つは、時があります。私の長男の時は、児童相談所やいろいろな所に相談に行きました。「時」というギリシャ語に2つの意味があります。一つは、クロノスというもので、もう一つは、カイロスというものです。クロノスというのは、時間の概念で

す。現代人は全部クロノスで動いています。だから電車が1分遅れても皆いららるのです。

カイロスは、花が咲く時、子どもが生まれる時、その時ということを言い表します。神様の時と言っても良いかもしれません。ですから、この子はこの子の時があるので、その時を待っていられるかどうかなのです。それを支える為にお母さんを支えることができるかどうかが大事です。親はあきらめられないんです。私は長男のことでなぜ学校に行かないんだものすごく悩みました。100回聞くんです。「なんか、あつたんか。学校で嫌な奴おらんか。」と。最初は、いじめから始まったのですが、3か月くらい経つと、本人もわからなくなるのです。何が嫌で、なぜ熱が出るのか。体がこわばるのか。下痢になるのか。分からないことを永遠と聞かれると、嘘をつくんです。「苦しいから」「犬が学校途中にいるから」と。でも、その犬を取り除いたとしても、解決しないのです。カイロスの時が経つのを待つのを支えることができるかなのです。問題

解決ではないのです。時が経つのを待てる社会をつくれるかどうか。このお母さんは苦しくても、悪くはありません。「子どもにとって、お母さんが頼みの綱で生き延びているのだから、世界中であなたしかできない役割なんだから、選ばれし者ですよ。」とってあげてください。



**山下** こうした事例が、このシンポジウムを通してネットにかかることが東海村のすごい所です。命の問題や虐

待の問題は、速やかに動かなくてはなりません。しかし、この事例のようにそうではない場合も、気持ちを寄せて、その人の生きている世界で理解する視点を私たちのなかでつくらなくてはなりません。私たちの物差しだけでは地域共生社会をつくるのではないのです。東海村は今も人口が増加しています。赤ちゃんからお年寄りまで、「丸ごと」みていくことが大事だと思います。

奥田さんにいくつかの質問がきていますので、お願いします。

**奥田** 今、ひきこもりの施設が出来ていますが、それについてどう思いますかという質問ですね。

今、日本ではひきこもりの問題が沢山でている。私たちは、長時間かけて向き合っています。私は、居住支援をすることが大事だと考えています。何年もひきこもってる人を集団生活に入れることほど、ハードルが高いことはありません。安心してひきこもれる社会づくりが大事です。親の代わりに目をかけてあげる人がいるアパート

が必要です。親元でひきこもっている人たちが安心して社会の中でひきこもれる社会をつくるのが大事です。その先に就労があります。ひきこもり先を社会化するとよいのです。一気に集団生活で自立生活塾のようにやると、つぶれてしまうのではと心配です。

次に、葬式をキリスト教でやることは大丈夫かという質問がきています。お坊さんにも呼び掛けています。お坊さんにも呼ばないないので、私が、参加者がなかなかないので、私がお坊さんにも呼ばないで、私がやっています。互助会の規約の中で、月500円を納めながら、こういうことが受けられます。また、やってもらいますということを決めています。互助会の規約と、細則で決まっています。うちは、公的に認められた納骨堂にお骨が埋まっているのです。お金がないから無料ということで、そこは宗教者が頑張るしかないのです。

**山下** では、クロノス。時間になりましたので終了いたします。ありがとうございました。ございました。